

22 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成21年4月
- ・児童生徒数 620名
- ・校内教育支援センター登録者数 7名
- ・利用者数（常時）4名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 14名（支援員等 0名）
- ・利用するまでの流れ

担任が校内支援センター担当教員に生徒の様子を説明した後、数週間試しに生徒が利用する。その後、校長、校内教育支援センター担当、担任、本人、保護者で面談を行い、校長の承認を得て正式に入級とする。

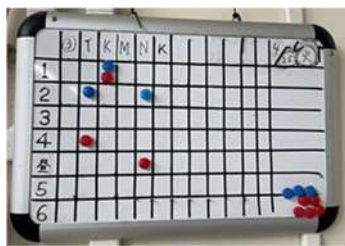
- ・ICTの活用の有無 有
 - ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無し（名）
- Teamsを活用して所属学級の授業の配信を行っている。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

ほぼ毎日センターで活動できている生徒に対しては、状況に応じて授業を行うなど、個に応じた学習が出来るよう支援している。毎日登校しない生徒に対しては、担任を通してセンターへの参加を促している。担任と生徒のやりとりファイルを作成し、心のつながりを継続できるようにしている。

取組事例・工夫点



職員室に上のようなボードを設置し、生徒の登・下校を職員が把握し、生徒とのコミュニケーションを積極的に取りやすいようにしている。

先生方や他の生徒とのコミュニケーションをとる機会を出来るだけ作っている。また、校内支援センターで授業を受けたり、課題を提出した場合、可能な限り通常学級の生徒と同様に評価をしている。

前時の授業者が次の時間の授業者に授業内容などを記入しているファイルをバトンの様に渡している。情報共有が密になり、生徒が安心して過ごせる環境を作りやすい。ファイルは管理職に提出し、状況把握出来る様にしている。

【3】成果と今後の課題等

成果

生徒と担任のやり取りファイルを生徒は楽しみにしており、担任と少なくとも文字ではコミュニケーションを取ることが出来る。また、多くの先生に声掛けをしてもらったり、本人の興味や状況に応じた対応を継続する事により、支援センターが安心できる居場所として過ごしていると思う。個にあった対応を続けていると、最初は相談室に週に何回か登校していた生徒が、現在では校内支援センターに毎日休まずに登校できるようになった。

課題

異学年の生徒や、学習進度が違う生徒が同時に授業を受ける場合、個に応じた対応をするのが難しい事もある。タブレットなどを活用しながら、1時間の中で出来るだけ生徒と対話しながら授業を行えるようにしたい。また、学校ホームページで校内教育支援センターの紹介をすることにより、以前よりも保護者の理解が進んだように思う。今後も継続したい。

23 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 不明
- ・児童生徒数 560 名
- ・校内教育支援センター登録者数 23 名
- ・利用者数（常時）15 名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 20 名（支援員等 0 名）
- ・利用するまでの流れ
担任→支援室担当→本人案内&確認→お試し期間→校長面談



- ・ICTの活用 ☒ 無
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 (0 名)
- リモート授業で使用

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

生徒の安全・安心していただける場所を確保する。押し付けるのではなく、やれるかやれないかを自分の気持ちと身体の調子に合わせて本人に判断してもらう。
社会的自立を目指す場であり、クラスに入ることを本人が目標にしていなければそこはゴールにしない。

取組事例・工夫点

- ・別室で、週に1度カウンセラーと話をする時間を設けている。
- ・教育相談部会での管理職・学年担当・カウンセラー・保健室・生徒指導との連携。
- ・毎日の記録を担当とも共有 になか気になることはすぐに報告・相談。
- ・自分の好きなものを飾り好きなものを認め合う。
- ・担当者が生徒の状況を常に確認し、教室に入れる・参加できる行事などは個別対応。
- ・教室を二つに分けている。前方は少人数で学習できるスペース。
後方にはパーテーションで区切り個別学習スペースを設けている。

【3】成果と今後の課題等

成果

教室に入ることができなかったが、センター内のパーテーションを見て「ここなら来れそう。」とのこと。それからほぼ毎日登校。最初は人と話をすることを極端にいやがっていた様子ではあったが、自分の描いた絵を自分の好きなものとして掲示したところ、ほかの生徒と話すきっかけとなり、少しずつ他学年の生徒と会話ができるようになった。同じくらいの年齢の人と話す楽しさを思い出したとのこと。昨年度までの自分より大きく成長した自分に自信が持てた様子。友達もでき、毎日楽しく過ごし、テストを受けたり美術などの作品も授業を受けて提出したりできることが増えた。前期は気力が低迷していた生徒が、後期はいろいろなことにチャレンジできるようになった。

課題

- ・年度の経過とともに、後方を希望する生徒が増えると場所がない。→生徒同士の関係がよくなり、前方で授業を一緒に受けられている。
- ・教員間の考え方の差（生徒の求めるものと教員の求めるものが違う）→間に入り、できないこと、やれることやりたくないことを伝えてお互い負担にならないようにする
- ・前期気持ちが落ち込んでいた生徒が技術と美術の作品を提出できなかったが、後期に気持ちが前向きになり、保護者の方から成績の相談があった。→できる範囲で作品化し、学年末評定に成績を加えることになった。

24 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 令和6年4月
- ・児童生徒数 400名
- ・校内教育支援センター登録者数 1名
- ・利用者数（常時）1名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 15名（支援員等 2名）
- ・利用するまでの流れ
担任が校内教育支援センター担当教員に概略を説明し、ケース会議（校長・教頭・生徒指導主事・学級担任・校内教育支援センター担当・本人・保護者）を開く。ケース会議で、本人・保護者の意向を聞き、本人に事前体験をしてもらい。その後、校長の承認を得て入室とする。
- ・ICTの活用の有無 無
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無（名）

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

全校生徒数のわりには、長期欠席をしている生徒が多い。学級担任が家庭訪問をし、本人・保護者との連絡を密にとっているのだが、なかなか学校に足が向かない現状が続いている。学級担任の方から、校内教育支援センター（ピアルームと呼ぶ）へ登校できる旨も話をしている。ピアルームでは、9教科の先生の授業が行えるように時間割を組み、生徒への支援を行っている。学級担任との連絡を密にとり、生徒がピアルームで安心して過ごせるように、支援体制を整えている。

取組事例・工夫点

ピアルームにある生徒の机や椅子も、お互いの距離が取れるように離してある。掲示物に関しても、月行事予定・週行事予定・学年だよりなどを貼り、様子が分かるようにしている。

ピアルーム内には、アコーデオンカーテンやパーテーションがあり、他の生徒と顔を会わせたくない生徒に対し、配慮をしている。

ピアルームでは時間割を組み、9教科の先生方が担当しているので、可能な限り教科の授業をするように心がけている。

【3】成果と今後の課題等

成果

- ・基本はケース会議を行い、通級できるかの判断をするのだが、担任の先生方のご苦労もあり、突然やってくる生徒もいる。登校した場合には、ピアルームで過ごせるようにしている。週に1日でも、1時間でも、給食を食べに来るだけでも、学校に姿を見せてもらいたい。
- ・担任、カウンセラーの先生方との連携を図ることが出来ている。

課題

- ・ピアルームでは、授業が受けられる体制を作っているのだが、生徒が授業を受ける状況になっておらず、本を読むなど自習に近い状況になっている。
- ・ピアルームに登校する生徒だが、定期的に来ることができておらず、ピアルームに生徒がいない状況が生まれてしまう。

25 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成21年 4月
- ・児童生徒数 790名
- ・校内教育支援センター登録者数 16名
- ・利用者数（常時） 7名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 12名（支援員等0名）
- ・利用するまでの流れ
担任が校内教育支援センター担当教員に概略を説明し、係わっている教員にも情報を共有し、仮入級する。その後、正式に入級を希望する場合、本人・保護者・担任・校長・担当で面談し、正式入級となる。
- ・ICTの活用の有無 無
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

毎日、支援教室に登校できている生徒もいるが、毎日登校できない生徒に対しては、担任やカウンセラーと連携をとって家庭連絡などしている。また、生徒と担任とのやりとりファイルの作成、学年集会や学活への参加など促しなど、クラスとの繋がりを切らないよう支援している。生徒が安心して過ごせるよう昼休みは一緒に過ごして会話をしている。

取組事例・工夫点

夏休みを利用して、民生児童委員の方に協力をして頂き、不登校生徒に向けて黑板アート&フードパントリーを開催した。



昨年度と授業担当者が大幅に入れ替わり、成績などに不安を訴える生徒がいたため、授業担当者で会議を開いた。生徒が困っていること、授業の進め方の確認、困り感を聞いたうえで授業改善方法などを話し合った。

支援教室で授業を受けた場合、自クラスの授業担当者と連携を取り、可能な限り通常の学級と同様の小テストなども行い、評価し、成績に反映させている。

【3】成果と今後の課題等

成果

- ・ほぼ毎日登校している生徒が数人おり、たくさん話をして穏やかに過ごしている。放課後支援教室の友達同士と一緒に遊ぶなど交友関係も少しずつ取り戻している。
- ・緊張感を持ちつつも、クラスの授業に参加した生徒が数人いた。
- ・支援教室でも全教科の授業があり、通常級の教科担任とも連携をし、課題や勉強に取り組むことができた。また、それを評価してもらい「やればできる」と自信を持てた。

課題

- ・支援教室で満足してしまい、教室へ行くメリットが見いだせない。
- ・自分が苦手なことや人を避けてしまう傾向があり、クラスへの復帰がなかなか難しい。
- ・担任や教科担任の支援教室への関わり方に個人差があるので、職員会議などで共通理解をしていく。

26 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 不明
- ・児童生徒数 370名
- ・校内教育支援センター登録者数 4名
- ・利用者数（常時） 1名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 8名（支援員等 0名）
- ・利用するまでの流れ 校内教育相談部会で情報を共有。担任から教室を紹介して、希望があれば 管理職、担任、担当教員と保護者、生徒と面接（教室の使用についての説明）の後、利用を開始する。
- ・ICTの活用の有無 有
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 有（1名）
- ミライシードで計算練習

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

校内支援としては、カウンセラーとの面談、通級指導教室も利用できるようにしている。学習に関しては、タブレットを使用することもある。担任が支援教室の授業時間に入っている。昼休みに外で友人と遊んで良い。部活に出ても構わないようにしている。行事に関しては情報を伝えて、見学など話し合っている。

取組事例・工夫点

コミュニケーションに不安のある生徒に、パーテーション越しに会話をし、後に自分からパーテーションから出て対面して会話できるよう環境を整えた。



定期試験や到達度試験を支援教室で実施し、通常の学級と同様に評価し、成績に反映させている。

異学年の支援教室の集団であるが、校内教職員の協力を得て、短時間でも授業形式で取組んでいる。

校内教育支援センターの機能充実のため、相談部会として時間割のコマに位置付け、週に1時間は、管理職・学年・養護教諭・SC・通級担当職員で情報交換と検討会を実施している。

【3】成果と今後の課題等

成果

進学対策は早めに取り組むようにしている。様々な学校があることを伝えるようにしている。
面談練習作文練習など早めに取り組んでいる。

課題

学習に関しての支援方法を考えていく必要がある。学習に対しての意識をもっと高める必要がある。
また、学年の違う生徒に対して効果的な学習の進め方も必要である。コミュニケーションに不安がある場合は通級などの利用も考えていく必要はある。

27 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 不明
- ・児童生徒数 610名
- ・校内教育支援センター登録者数 9名
- ・利用者数（常時）5名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 13名（支援員等 0名）
- ・利用するまでの流れ
 - ①生徒の情報を得るために、担任に「聞き取り用紙」を書いてもらう。
 - ②見学をして教室の雰囲気を知り、無理のない日程から登校できるようにする。
 - ③お試し期間を1ヵ月程度設け定期的に登校出来るようになれば保護者も含めた入級面接を行う。
- ・ICTの活用の有無 有（エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 有 1名）
Teams を利用して次の日の時間割と教室の様子を写真と一言で毎日配信している。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

登校時間は通常学級の10分後までは遅刻にはせず、教室に掲示してある記録表に生徒自身が記入する。必要に応じて、定期的にカウンセラーと面談をし、無理のない範囲で所属学級で授業を受けられるときは、受ける。担任との「やりとりファイル」で情報を共有しながら支援を行い、授業担当者間でも記録ファイルを共有し、遅刻早退した生徒や授業内容などを記録して共通理解を図っている。

取組事例・工夫点

教室の入り口の目隠し板に季節に応じた作品を生徒たちが作って装飾をし、行事を楽しむ雰囲気作りをしている。



支援教室の前にある花壇にゴーヤの苗を生徒たちで植え、収穫をした。家に持ち帰り、家族にも喜んでもらえたと話していた。



国語の授業で作成した俳句や回文を掲示し、互いの個性を認め合える機会を作っている。



【3】成果と今後の課題等

成果

さまざまな事情を抱え、所属学級だけでは過ごせない生徒が個々のペースで登校し、学習を進めたり体調や気持ちを整えたりしている。2学期になり、新たに3年生が4人入級し雰囲気がずいぶん変わったが、掲示物作りや花壇の手入れの作業などをしながら徐々に打ち解け、それぞれが進路選択に向けて高校でやりたいことや学校見学をした感想などを話しながら準備をしている。小さな集団の中で社会的な自立に向けての必要な居場所となっている。

課題

支援教室にある座席は10席で、現在9名が利用している。今後人数が増えた場合にどう対応していくかが課題である。常時登校できている生徒と2～3週間に1回の登校の生徒、それぞれのペースを認めながら居場所を確保できるような体制を整えていきたい。

28 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 不明
- ・児童生徒数 870名
- ・校内教育支援センター登録者数 19名
- ・利用者数（常時）6～7名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 18名（支援員等 1名）
- ・利用するまでの流れ
 - ①担任が支援教室担当へ相談する。
 - ②学年に報告・相談する。本人・保護者に担任がさわやか教室を紹介する。養護教諭・カウンセラーの判断で勧めてもらう場合もある。
 - ③生徒本人・保護者、担任と一緒に支援教室教室を見学。支援教室担当者が案内する→希望すれば、体験入級開始。
 - ④支援教室に登校し、体験入級として学校生活を送る。
 - ⑤支援教室担当者・学級担任で、入級について話し合う。学年へ報告。
 - ⑥本人・保護者・担任・さわやか担当者・校長先生で入級面談を行う。
 - ⑦「入級するにあたって」を了承し、正式入級となる。
- ・ICTの活用の有無 無
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 有（1名）

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

- ・入級までの方法を各生徒の状況に合わせて変えている。入級するまでにクラスとのつながりをもてるようにし、その上で支援教室に入級という流れをとることで、将来的に学級へ戻るハードルが下がり効果的である。
- ・入級後、すぐに学習に取り組むことができない生徒も多くいる。そのため、ゲーム等を通して支援教室内の人間関係の安定を図ってから学習につないでいくようにしている。
- ・支援教室の目の前にある畑で作物を育てることにより、自分がかかわったことの成果を実感させること、また、精神的な安定を図ることができるため取り組んでいる。
- ・様々な大人とかかわりをもたせるため、各学年の先生の授業を16時間組んでいる。

取組事例・工夫点

【野菜の栽培】

今年は、きゅうり、トマト、スイカ、茄子、サツマイモを育てた。スイカは一学期の終業式に皆で食し、サツマイモは家庭科の調理実習で使った。他の野菜は各自持ち帰りとした。作物を育てることにより、その生長を目の当たりにすることができ、生徒自身のかかわりが実感できたようである。



【進路情報】

5月下旬くらいから、各通信制高校のHPから必要な情報を抜き取り掲示した。

生徒は6月ころから説明会に参加するようになり早くからの取り組みができた。また、なかなか登校できない生徒の保護者が来室し掲示されている情報をもとに、子供と一緒に見学に行くなど一定の成果を生み出している。



【ゲーム類】

複数の人たちで楽しめるゲーム（1000ピースのジグソーパズル、トランプ、坊主めくり）をすることによって、人という楽しさや関係のもち方を学べた。



【3】成果と今後の課題等

成果

- ①「給食だけ食べて帰る」ことから支援教室に慣れ、まったく教室へ行くことができなかった生徒が登校できるようになった。
- ②トランプやジグソーパズル等を通して、人とかかわりの場ができ、対人関係の経験の場として有効であった。
- ③対人関係に少し自信を持ち始め、先輩後輩ともに仲良く学校生活を送っている。自分の居場所を見出すことにもつながり、精神的に安定してきている生徒も多い。
- ④多くの教員がさわやか教室の授業を担当することで、通室生徒の社会性やコミュニケーション力が育まれている面もある。

課題

- ①不登校であった期間や本人の特性により学習の進度が様々である。個々の状況に対応した学習環境や授業の進め方に課題を感じる。
- ②活動場所・支援人員の不足、支援教室用の予算がない等が課題である。
- ③入級の方法と時期の見極めが難しい。
- ④学校に登校できていない生徒への支援の方法に苦慮している。

29 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成28年4月
- ・児童生徒数 410名
- ・校内教育支援センター登録者数 4名
- ・利用者数（常時） 3名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 15名（支援員等 3名）
- ・利用するまでの流れ
担任が校内教育支援センター担当教員に概略を説明し、校内ケースを開く。体験期間を設け、生徒、保護者の意向を確認後、校長面談を経て正式入室となる。
- ・ICTの活用の有無 有
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無（0名）
Teamsを活用して授業の配信を行っている。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

- ① 登校・所属学級での学校生活を目標にしているが、個々の状況を考慮し支援を行う。
- ② 生徒個々の状況を把握し、個のニーズに応じた支援を行う。
- ③ 学級担任・家庭・支援室担当者・スクールサポートスタッフ・養護教諭・生徒指導・カウンセラーを中心として、全教職員・外部機関等連携を取りながら支援にあたる。

取組事例・工夫点

その日の予定がはっきりわかるように、時間割、担当教員のカードを張り、帰りには、翌日の日課がわかるように一緒に貼り替えている。



支援教室では、各教科の担当教師が授業をしている。時期に合わせて、提出物を学習して教科担任に出せるように促す声掛けをしている。

技能教科も作品制作や楽器練習を行ったりしている。体育では、生徒同士で試合をしたり、時には教員も参加し楽しみながら取り組める時間となっている。それぞれの取り組みを評価し、成績に反映させている。

【3】成果と今後の課題等

成果

異なる学年でも、一緒に過ごすことでコミュニケーションが生まれ、子ども同士の交流がみられるようになった。やはり、少人数で生徒同士話したり活動したりすることは、良い登校刺激になっているようだ。一クラスの大人数では自分を表現しづらい傾向にある生徒が多くみられるので、このような支援教室で集団意識を持たせるのに効果的である。

課題

登校せずに家庭での生活に慣れてしまっている生徒にどのように登校刺激をしたらよいか。また、登校しづらくなったきっかけ、理由がはっきりつかめない生徒が多いので、今後、生徒、保護者への対応が課題である。

30 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成19年4月
- ・児童生徒数 750名
- ・校内教育支援センター登録者数 10名
- ・利用者数（常時） 6名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 11名（支援員等 1名）
- ・利用するまでの流れ

担任が校内教育支援センター担当教員に概略を説明し、本人・保護者・担任を交えて、校内教育支援センター担当教員と生徒指導主任で面談や相談・見学を行う。その後、校長の承認を得て入室となる。

- ・ICTの活用の有無 有
 - ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 有（3名）
- Teamsのアプリを活用して授業内容を共有することや、練習問題に取り組んでいる。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

登校ペースに個人差があるため個に応じた無理のないペースで活動出来るよう本人・保護者・担任と連携しながら支援を行っている。また1日の生活リズムを自己決定できるように生活の記録簿を作成し、担任とのコミュニケーションとしても活用している。1週間の予定に見通しをもち生徒が安心して登校できるよう支援を行い、全職員への周知理解に努めている。

取組事例・工夫点

帰学活では生徒が司会進行をしている。1人一言話す時間を設け、生徒の主体的な場面を作っている。教室の掲示物を生徒と作成し、また学校行事に関する掲示物を作ることで学年学級の様子が生徒にわかるようにした。



週に1回校内教育支援センター担当が体育の授業で卓球やバドミントンを行っている。体を動かすことで健康増進、生徒同士のコミュニケーションがとれ、勝敗に限らず自身の良いプレーに喜びを味わうことができる。週に1回だが参加率は高いものとなった。

学習に対して苦手意識を持っている生徒へは技能教科の活動を大切に、家庭科では調理実習を行い自分で作って食べる喜びを味わった。校内教育支援センターで受けた授業は評価や成績にも反映させている。

【3】成果と今後の課題等

成果

週に1回の校内教育支援センター担当と行う体育が金曜日だったこともあり登校が増えた生徒や登校が安定した生徒が多かった。授業で体を動かし、小集団でコミュニケーションをとることで無理なく自分のペースで1日を過ごせている。担任や学年職員、保護者とも連携がしやすく、校内教育支援教室の方針をよく理解してくれている。学習に関して心配する生徒・保護者もいるが、校内教育支援センターでの授業内容も評価してもらえることで安心感につながった。

課題

校内教育支援センターによる支援が必要な生徒はたくさんいるが、多くは繋がっていないように感じる。周知が不足しているため、今後は保護者及び全校生徒への周知の場や案内等の作成が必要だと考える。また学校に來るとどうしても授業を受けなければならない思いがちだが、多様な生徒の状況に合わせた個別支援ができるように教室環境や職員への周知を見直していく必要がある。

3 1 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成19年4月
- ・児童生徒数 590 名
- ・校内教育支援センター登録者数 10 名
- ・利用者数（常時）5 名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 15 名（支援員等 0 名）
- ・利用するまでの流れ

本人、保護者の意思を確認し、学年会で話し合い、教育相談部会で審議・承諾、校長の同意を得る。本人の希望、センターでの決まり等を本人、保護者、担任、不登校支援担当教員で面談し、保護者が同意書を提出し入室する。その後、職員会議等で全職員に周知する。

- ・ICTの活用の有無 有
 - ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 有（2名）
- 希望する生徒に対して、オンラインで教室の授業を受けられるようにした。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

不登校生徒の解消を目指して、支援教室へ登校させ、心のケア、学習指導等を行い学校及び学級への復帰を実現する。

取組事例・工夫点

登校後、自分で今日一日の予定を立て、職員室に登校を報告し、担任・学年職員（職員ならだれでも）に予定を見せ、サインをもらう。予定は変更しても構わない。下校時には、今日一日行ったこと、日記を書き、職員室の担任の机の上に提出し、下校の挨拶をして下校する。慣れるまでは、職員室に同行し、一緒に職員に声を掛けるようにした。

全教科専門の教員が入ったことによって、授業が充実した。各教科の先生方には、教科部会で学年の授業の内容等を確認してもらい、プリント等も教室と同じものを使えるようにした。

チームスを利用し、オンラインで教室の授業を受けられるようにした。教室からの一方通行なので、安心して授業を受けることができた。



【3】成果と今後の課題等

成果

当初は一人で職員室に入れず、必ず同行し、一緒にサインをもらう教員に声掛けをするようにしたが、どの生徒も自分一人で行えるようになった。授業をしっかり行うことで学習に対する意欲や自信が高まり、学習以外（清掃、行事、他者との関係）のことにも意欲的に取り組めるようになった。オンライン授業では、教室での授業の様子を見られ、教室の様子が分かり、授業だけでなく、生活全般、人間関係など、様々ことの安心につながった。

課題

校内教育支援センターには通って来られ、そこでは明るく生活できる生徒は増えたが、所属クラスの教室に戻ることはほとんどの生徒ができなかった。センターが安心して通える場所にはなっていると思うが、校内に安心して、学習や運動、生活ができる場所を増やして行くことが必要であり、課題である。そのためには、支援センターが多くの教員、生徒に認知されて行くように担当が心がけていかなくてはならないだろう。

32 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成19年4月
- ・児童生徒数 340名
- ・校内教育支援センター登録者数 7名
- ・利用者数（常時） 5名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 30名（支援員等 3名）
- ・利用するまでの流れ

1か月程度の試行期間終了時に、正式に利用を希望する場合には、本人・保護者と校長、生徒指導主任、学年主任、担任での面接を実施する。センターへの登校の許可申請書の提出後、入室許可書の発行をもって正式にセンターへの登校開始となる。

- ・ICTの活用の有無 無
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

教室に入ることが難しい生徒がセンターで授業に参加している。担任との連携のために生活ノートの記入や教科担当が行った授業内容を校内支援教室にあるファイルに残し、生徒の状況を把握できるようにしている。生徒が安心してセンターで過ごせるよう、全教職員での共通理解を行っている。

取組事例・工夫点

センター担当教員と支援員が学年と密に情報共有を行っている。学年全体での動きを把握し、あらかじめ生徒に伝えることで生徒が心に余裕をもって参加できる環境を整えている。

センターにてすべての教科において専科教員の授業のコマを確保している。

生徒が安心して過ごせる場所になるように、校内担当教員が最低1日1回は生徒に会い、コミュニケーションをとるようにしている。



センターで授業を受けた場合、通常の学級と同様に評価し、成績に反映させている。また、成績をつけるための課題の提示も行っている。

【3】成果と今後の課題等

成果

学年の動きをあらかじめ生徒に伝えることで生徒が学年や学校全体での動きに参加できる機会が増えた。校内教育支援センターが一時的な避難所の役割も果たし、安心して過ごせる場所があることで学校から足が遠のいていた生徒も校内教育支援センターの一次利用を経て、最終的に学級に復帰することができた。

課題

教員の数少なく、担任や学年と会う時間の確保が難しい。また、継続的に授業に参加できていない生徒がいるため、個に応じた対応が難しくなっている。

生徒それぞれの特性を教職員が共通理解し、支援していくことや担当教員のスキルアップが望まれる。

33 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成19年4月
 - ・児童生徒数 800名
 - ・校内教育支援センター登録者数 8名
 - ・利用者数（常時）13名（一時的5名）
 - ・校内教育支援センターに係わっている教員数 10名（支援員等 1名）
 - ・利用するまでの流れ
担任 → 担当 お試し期間 → 面談にて正式入室（教頭・担任・担当・本人・保護者）
 - ・ICTの活用の有無 有
 - ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無
- 校内で学年ごとにオンライン授業の表を作っている。生徒はその表を見て受けたい授業を受けている。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

- ・生徒によって登校時間もまちまちではあるが、自分のペースで登校、1日の予定を考えて1日を過ごしている。登校したら今日の予定を考えてファイルに記入、教室前方のホワイトボードに記入する。帰る前に今日1日どのように過ごしたかをファイルに記入。担当と担任が一言記入する。
- ・その時間の担当教員は授業を行い、評価につなげる。
- ・教育相談員と連携し、生徒の心のケアを行う。

取組事例・工夫点

人数が増えることにより、この教室内での不満、改善したい点がでてきた。一人一人聞き取りを行い、ルーム内での決まりを作成した。今後は席替えなども生徒主体で行う予定。

各学年にお願いしてオンライン授業を行っている。1週間の予定表（どの先生がどのクラスで行うか）を各学年ごとに作成。生徒はそれを見て受けたい授業のオンラインを受けている。

みんなで季節の掲示物を作成して、掲示している。



【3】成果と今後の課題等

成果

- ・欠席が続いていた生徒が少しずつ登校できるようになり、登校時間も早くなってきた。
- ・学習意欲の高い生徒にとってオンライン授業を色々な先生方にやって頂けたのはよかった。

課題

- ・担当としてくる先生に授業をお願いしたいが、コマ数の関係で同じ先生が何回か来ることもあり、難しい。
- ・ルーム内の生徒同士のコミュニケーションを円滑にしたい。
- ・技能教科の評価の問題。

34 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成19年4月
- ・児童生徒数 730名
- ・校内教育支援センター登録者数 5名
- ・利用者数（常時） 11名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 14名（支援員等 1名）
- ・利用するまでの流れ
学年室対応→保健室・センターで対応→担任が本人・保護者に説明し意向を確認→教育相談部会で共有→本人・保護者の希望があれば保護者が来校し、センターへの見学・相談→管理職と面談し、入室届を校長が受理して入室となる。
- ・ICTの活用の有無 無
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 有 1名

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

毎日センターで活動できている生徒もいるが、毎日来られない生徒に対しては、担任と担当者との連携を図り、短期目標を決めてセンターへの参加を促している。担任との連携ファイルを作成し、担任との情報共有を密にして、支援を行っている。また、週一回の教育相談部会でセンターの状況を把握し、全教職員への共通理解を図っている。

取組事例・工夫点

異年齢での集団活動も積極的に行い、行事やクリスマスなどに合わせて、掲示物や装飾品を作成させ、明るい教室づくりをした。また、行事などの板書、イラスト等の画像を掲示している。



学年を超えて、英語のコミュニケーション能力を高める授業をクイズ形式で実施した。

また、技能教科を中心に教科担当から提出物、期限を確認し、作品提出など通常の学級と同様に評価し、成績に反映させている。

正式入室の手続きを行う前でも、教室に入れない生徒に対しての居場所として、受け入れを行っている。その中で、様々な職員が関わり、早期の学級復帰につながったケースもあった。

【3】成果と今後の課題等

成果

校内教育支援センターを設置したことで、生徒、保護者に対して教室でなくても勉強ができる、不安が解消するまでの居場所があるというアプローチができつつある。

課題

生徒、保護者への校内教育支援センターの理解を進めていく必要がある。
学校全体で対応にあたっているが、異年齢の生徒が利用しているため、一斉の授業はほとんどできず、個別学習になり、それを授業担当者がサポートする状況が多くなっている。
多様な支援が必要であり、担当教員のスキルアップが望まれる。

35 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成19年4月
 - ・本校在籍生徒数 530名
 - ・校内教育支援センター登録者数 5名（他仮入室3名）
 - ・利用者数（常時） 5名
 - ・校内教育支援センターに係わっている教員数 14名（うち教育相談員、SC 各1名）
 - ・利用するまでの流れ
 - ① 利用が適切かどうかについて、本人の意思、保護者の意向、担任の見立て、学年の意向を踏まえ、教育相談部会で情報共有し、検討する。
 - ② ステップルーム（SR）の過ごし方について本人に説明の上、2週間程度の仮入室を行う。
 - ③ 仮入室終了後、本人と保護者の意思を担任、SR担当が確認
 - ④ 希望あり→本人・保護者が校長面談→通室の判断→SR担当から通室希望書の配付→校長に提出希望なし→関係者（本人、保護者、担任、学年→相談部会等）で今後について検討する。
 - ・ICTの活用の有無 有
 - ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無
- Teams を活用し、SR のチームを作成。主に長期休業中の連絡ややりとりに使用している。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

- ・最大の目標は、校内における生徒の居場所づくりである。教室にはまだ足が向かないが、ステップルーム（SR）になら行けるという状態の生徒に対し、個に応じて支援することで、ステップアップを目指している。
- ・「SR を利用している」という点に関しては利用生徒全員が同じ状態ではあるが、その状態に至るまでの経緯や背景は一人一人異なる。それを生徒にも伝え、教員側の提案が生徒により異なることへの理解を促すと同時に、自分自身の課題・目標を確認させている。
- ・生徒個人のファイルで生徒・担任間のコミュニケーション、教員用ファイルで生徒の様子の情報共有をすることで、SR に携わる教員皆が生徒の実態把握をし、支援方針の共有を図っている。また、週1回の教育相談部会においても情報共有を実施している。

取組事例・工夫点

- ・週予定の掲示と活用
登校が不規則な生徒、見通しが持てないことに不安を感じる生徒がいるため、毎週時間割（日課・予定）を示し、1週間の予定を視覚化した。右の写真は二者面談期間のため毎日5時間授業となった週のもの。対生徒だけでなく教員間での連絡調整もスムーズに行うことができた。

日	月	火	水	木	金	SR
1	SR	SR	SR	SR	家	
2	数	英	国	数	数	
3	英	技	体	美	体	
4	理	英	音	英	社	
5	学	SR	総	SR	SR	
6	-	-	-	-	-	

- ・SRの時間の活用
毎日1時間目と5（又は6）時間目は「SR」の時間とし、個々にその時必要な課題に取り組む時間としている。具体的には、生徒が困っていることや控えている行事の参加方法についての面談、定期テスト前には提出物対策、受験を控えた生徒には面接練習や作文練習を行った。息抜きには、コミュニケーションを取ることができるゲームを取り入れた。生徒が「SRに登校して相談すると、解決できることもある」「楽しいこともある」と思えるような時間になるよう心掛けた結果、SRの時間を目指して登校する生徒が増えた。

【3】成果と今後の課題等

成果

徐々に生徒が見通しをもち、学校全体の動きと自分の行動を結び付けて考えるようになった。また、面談等に同席し保護者と複数回対面で話す機会を持ったことで、SR 担当が電話連絡や家庭訪問を行いやすくなり、担任・保護者の方とより連携して生徒を支援することができるようになった。

課題

SR が学校での居場所にはなり、登校を再開することができた生徒への継続的な支援の仕方が課題である。校内における職員間の連携と家庭との連携を強化し、生徒の実態に応じた対応を検討する必要がある。

36 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 令和5年 4月
- ・児童生徒数 599名
- ・校内教育支援センター登録者数 10名
- ・利用者数（常時） 5名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 12名（支援員等 0名）
- ・利用するまでの流れ
担任が養護教諭に概略を説明し、担任、養護教諭、保護者、校内教育支援センター担当教員と本人が話し合い、入室とする。
- ・ICTの活用の有無 有
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無（0名）
NHK for School の視聴／ドリルパークの利用

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

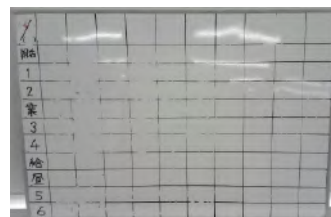
支援方針

教室で学ぶことが難しい児童が安心して学習に取り組むことができるように、教員間で情報を共有し、社会的自立を見据え、チームとして支援にあたっている。

その日の予定を児童自身が原学級の時間割をもとに自分で決めて実践することや、原学級の学習進度を意識した学習や、経験の共有ができることを目指して支援している。

取組事例・工夫点

センター内の飾りを、センターを利用する児童と一緒に作って飾りつけたり、センターを利用する児童だけで学級新聞を作って掲示したりして、児童の小学校に対する所属感を深める活動を行っている。



センターを利用する各児童の、その日の予定を一覧にして掲示することで、児童同士がお互いの予定を把握することを助け、児童全員やグループで一緒に運動する時間の計画を児童だけで立て易くしている。

同学年や異学年で勉強を教え合うことで、一人では学習に気持ちが前向きになりにくい時でも勉強することができた。

【3】成果と今後の課題等

成果

センターを利用するという選択肢があることで、昨年度、長欠だった複数の児童が、ほぼ毎日登校することができた。センターに登校できた児童の中には、1時間からでも原学級で学ぶことができたり、完全に原学級に戻れたりした児童がいた。

センターでのグループ活動を通して仲間意識が芽生え、仲間と協力して勉強したり、運動したりする体験をすることができた。

課題

発達障害などの特別な支援が必要な児童が大半を占めており、対応する教員の知識・力量の向上が必要であった。また、個別対応をすると、その他の児童への対応ができない状況が生まれたので、少しの空き時間でもセンターの児童の学習を支援に入れるように、先生方をお願いした。学級費が無いことにより物品の購入が思うようにできず、制限された活動になってしまいうことが多々あった。

37 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 不明
- ・生徒数 909名
- ・校内教育支援センター登録者数 17名
- ・利用者数（常時） 12名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 14名（支援員等 1名）
- ・利用するまでの流れ

保護者・本人
からの要望



担任等と
面談



センター担当者
との打ち合わせ



登室開始

- ・ICTの活用の有無 有
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無（4名）

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

不登校傾向にある生徒に対する適切な支援を行うために、安心して登校できるよう居場所の確保を目的として設置している学級です。生徒の現状を把握し、適切な課題を与え、できる喜びや達成感を味わえるよう支援していきます。生徒一人一人の状況に応じ、当該学年スタッフと綿密な連携を行い、柔軟な対応を心掛けていきます。

取組事例・工夫点

登校時間・登校頻度等を本人の状況に応じて、設定するとともに、誰が見てもわかるように、教室に出欠用マグネットを設置している。

そうすることにより、担当職員以外でも登室状況を把握することができる。また、自教室、保健室等の印を設けることで、生徒本人の居場所が一目でわかるようになっている。

センター独自の時間割を設定し、教育相談等に充てる時間と、教科担当者による授業を展開している。そうすることで、センターに在室することでの評価・評定が不利にならないよう配慮している。



ワークや学習プリントの教材類、教室での配付物が確実にわたるよう、日々、学級担任及び学年職員が生徒と関係を持ち、学級・学年と結びつきを持てるようにしています。

【3】成果と今後の課題等

成果

センターでの対応を柔軟かつ学校全体で対応することで、利用する生徒及び保護者からは安心して登校できると評価をいただいている。また、センター内での生徒同士の交流も増え、人間関係作りにも役立っている。学級・学年・学校行事において、仲間や担任などが働きかけることで、学級への復帰がスムーズにいくケースがあった。

課題

センターでの過ごしやすい環境をつくることで、所属している学級に復帰していくことが難しいように感じる。また、教科担任による授業を行うことで、各担当の授業のコマ数が増え、負担感を感じている教員もいる。生徒一人一人の細やかな支援と教員の負担感の折り合いが課題となっている。

38 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 令和5年4月
- ・児童生徒数 914名
- ・校内教育支援センター登録者数 25名
- ・利用者数（常時 10名）
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 12名（支援員等0名）
- ・利用するまでの流れ

- ①対象生徒の不登校の状態や状況，それを引き起こしている原因や要因を可能な限り探り，教頭，学級担任，支援センター担当教員で情報を共有する。
- ②本人，保護者が学級担任から支援センターの趣旨，支援内容等についての情報を得る。必要に応じて本人，保護者が実際に支援センターを見学，体験する。
- ③支援センター利用の意向が示されたら，本人，保護者と教頭，学級担任，支援センター担当教員で面談を行い，利用の希望を確認する。
- ④利用申請書を保護者が学級担任を通じて教頭に提出する。

- ・ICTの活用 有
- ・エデュオブちばオンライン授業利用生徒の人数 2人（登録者5名）

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

- ①人的環境としては，校内のできるだけ多数の教員が対象生徒に関われるよう，校内組織や教育課程を工夫している。
- ②週29コマの支援センターの時間割を作成し，毎週それに沿った授業を実施した。9教科12名の教科担任を配置して学習指導を行っている。
- ③それにより，対象生徒の個々の状態や状況を多数の教員の目で把握し，同時にそれぞれの生徒がより多くの教員との関係づくりができるように努めている。



取組事例・工夫点

女子生徒は，ある部活動に所属しており，その部活動の朝練習に参加できないことから集団活動に違和感を覚え，活動意欲が減退していた。その部活動の活動内容そのものについては関心意欲が高く，一人でも取り組んでいた。しかしそれに加え，身体的不調を訴え，それによる欠席が増え始め不登校の状況に至り，1年生時に面談し利用を開始した。その後，校内教育支援センターへ少しずつ登校できるようになり，学習習慣を確立できた。2年生になり，新しい部活動に参加することで環境を変えることができた。利用が増える異学年の生徒も入り，小規模な集団でのコミュニケーションができた。おのずから役割も発生し，事例の生徒は毎日の日課表の管理などの役割に価値を見出し，積極的に担うようになってきた。このようなことを通して，事例の生徒は自己有用感，自己肯定感を高め，ほぼ毎日出席している。校内教育支援センターの工夫点は以下の点である。

- ① 登下校時に昇降口から支援教室，トイレまでの動線で生徒にストレスがかからないように配慮した。
- ② 教室のタブレット端末を移動し，支援教室での保管と充電ができるようにした。
- ③ 黒板の代わりに2枚のホワイトボードを壁に設置し，プロジェクタ，プレーヤー，タブレットクレードルボードに投影した。

【3】成果と今後の課題等

成果

現在，全学年で25名が利用の希望面談を終え，常時8～10名の生徒が利用している。校内教育支援センター活用の有無という視点で見れば，成果と言える。但し不登校の状態，状況が本質的に解消され，引き起こしている原因，要因が取り除かれたわけではない。

課題

不登校は，その生徒の状態，状況を示しており，しかも対象生徒に一律ではない。ほぼ全欠の生徒，断続的に欠席を繰り返すなど様々である。不登校に至った原因，要因はさらに多様であると考えられる。授業についていけない，学級や部活動等の集団に入っていけない等の訴えを示す生徒もいる。父母や家族との関係が良好でなく，それに起因していることもある。また本人に何らかの発達障害が疑われる様相を示す生徒，心身の不具合等様々で，またそれらが重複している場合が多い。校内教育支援センター担当教諭が，対象生徒の不登校状態，状況に至った原因や要因を把握し得ていないことが課題である。担任，養護教諭，特別支援コーディネーター，スクールカウンセラーを含めた校内組織で可能な限りの情報共有を行っているが，専門的な知見を得るために，教育委員会，子ども相談センターおよび児童相談所，子どもと親のサポートセンター等との連携した取り組みが不可欠であると考ええる。

39 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 令和4年4月
- ・児童生徒数 515名
- ・校内教育支援センター登録者数 2名
- ・利用者数（常時）1名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 7名（支援員等 1名）
- ・利用するまでの流れ
担任と児童生徒で面談を行い、本人の意向を確認する。担任から保護者へ連絡し承認を得る。
担任は職員打合せで職員に周知し、本人の利用を開始する。
- ・ICTの活用の有無 有
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 無
Teamsで短学活を配信して健康観察を行っている。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

「誰一人取り残さない」を軸に、どの児童生徒もいつでも受け入れられるように運営している。毎時間利用することもあれば、教室で授業を受ける時もあるため、担任との情報共有の必要性がある。どの児童生徒も安心して学校生活を送ることができるように、全職員で支援方針の共通理解を図っている。

取組事例・工夫点

支援教室の掲示物を一緒に作成したり、学校で使っていた壊れた箸を直したり、ものづくりをメインに活動を行った。また、作成した作品を教室内に飾り、支援センターを利用する児童生徒が温かい雰囲気を感じられるようにした。



長欠の生徒に少しでも学校の雰囲気を感じられるように、teamsを使った健康観察を行った。画面を通じてクラスの友達と会話することができた。

その日一日の活動や学習内容がわかるように、連絡ノートを作成し、担任や支援センターに関わっている先生方とのスムーズな情報共有を行った。これにより、どの職員でも円滑に対応することができている。

【3】成果と今後の課題等

成果

学校に来て制作活動をしたり、支援教室でコミュニケーションを取る機会が増えたりしたことで、1学期よりも教室に行き授業を受けたり、友達と遊んだりする機会が増えた。また、teamsを使った健康観察を行ったことで、友達とコミュニケーションが取れるようになった。毎朝の健康観察を楽しみにしているため、徐々に学校に行きたいと感じられるように続けていきたい。

課題

利用が不規則の児童生徒がいるため、担任と上手く情報共有ができない時があった。いつでも受け入れられるようにするために、その日の予定だけでなく、1週間程度の見通しを持った計画を立て、連携を密に図る必要がある。

40 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成8年9月
- ・児童生徒数 608名
- ・校内教育支援センター登録者数 6名
- ・利用者数（常時） 6名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 16名（支援員等2名）
- ・利用するまでの流れ
不登校等の事案が生じた際に、ケース会議（担任・生徒指導・学年生徒指導・センター担当など）を設け、今後の方向性の1つとして提案をする。その後、体験期間を経て継続の希望があれば、利用開始面談（本人・保護者・担任・管理職・センター担当）を行い、入室とする。
- ・ICTの活用の有無 **有** ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 **無**
Teamsを活用して、所属学年の授業の配信を行っている。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

毎日センターを活用できている生徒もいるが、毎日これられない生徒や朝から登校できない生徒に対しては、状況を確認した上で短期目標を決めて登校を促している。短期目標の設定は、学期末面談（本人・保護者・担任・センター担当）毎に行っている。社会性を養うために、センターの外でも学びや体験の機会がもてるように教職員が連携し協力して支援にあたっている。

取組事例・工夫点

センター内での学習活動の可視化の手段として、対面授業・リモート授業を行った場合は、振り返りシートを記入し、学習活動の記録を残している。また、各教科の課題も可能な限り教科の授業で実施し、学年の教科担当へ提出している。総合や道徳等も可能な限り実施し、評定不能ができるだけ生じないように心がけている。



生活記録ノートを、スケジュール管理や担任との交流の手段として活用している。センター利用者の中には服薬が必要な生徒もあり、お薬カレンダーとしても役立っている。

センター外での活動として、相談室や図書室、校内スタディサポートルームの利用、特別支援学級との交流を設定している。特に相談室はセンター利用者のお大半が定期的に利用しており、困り感の早期発見やSSTを学ぶ場として大きな役割を果たしている。

【3】成果と今後の課題等

成果

ほぼ毎時間授業を受けた生徒については、全教科評定2以上が達成された。それぞれの得意教科ではより良い評価を得ることができた。センター外での活動を通して、より多くの教職員や利用者以外の生徒との接点を増やすようにし、社会性を養うことに努めた。その成果を測ることは難しいが、これまで発言が見られなかった生徒が発言するようになったり、昨年不参加だった生徒が学校行事に可能な形で参加したりするなど変化が見られた。

課題

3学年が混在している状況のため、教科の先生方の指導の負担が大きい。評価を意識すると授業の進捗状況に合わせた内容が望ましいと考えるが、基礎的な学力が身に付いていない生徒も多いので、実態に合わせた内容にするべきか判断が難しい。

4 1 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 平成29年4月
- ・児童生徒数 659名
- ・校内教育支援センター登録者数 21名
- ・利用者数（常時）5名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 12名（支援員等0名）
- ・利用するまでの流れ
生徒にまたは保護者からの相談や申し出をうけ、担当、担任、管理職で、保護者、生徒との教育相談を実施。生徒、保護者、担当で、利用計画をたてる。利用計画に基づき利用を行い、必要に応じて計画を見直すことも視野に入れて利用を開始。
- ・ICTの活用の有無 **有**
- ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無 **有**（1名）
リモートで在籍学級の授業をうける、またはGIGA端末のデジタルコンテンツを利用する。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

- ・生徒理解を深め、将来的な社会的自立を目指し、「個」に応じた支援を図る。
- ・利用する生徒の心理的安全の保障と、個人の目標設定を行い、校内体制で支援を行う。

取組事例・工夫点

オンラインで学習に参加している生徒は、校内教育支援センターで定期試験も全教科受けることができている。レポートやワークなどの提出物も可能な限り提出することができている。技能教科（保健体育、音楽、美術、技家）に一部参加する生徒もいる。



一人でいたい生徒に対して、ジグソーパズルやパーテーションで仕切った空間も活用している。室内に談話や休憩ができるソファークーナーを設置し、心地よい居場所としての機能をもたせた。



SST（コミュニケーション力を高めるゲーム）を定期的の実施している。

【3】成果と今後の課題等

成果

在籍学級への復帰だけを最終目標とせず、個に応じた支援を行った結果、クラスには行くことができないが、継続して校内教育支援センター登校する生徒が増えた。中にはほとんど欠席もなく、毎日登校できる生徒もいた。
紙面での周知や研修のために「STEP」を月に1～2回発行したので、校内教育支援センターの共通理解を促すことができた。

課題

子どもへの教育への考え方の違いや保護者一人で養育を行わざるを得ない等の家庭環境を起因とする長欠生徒と小学校段階からの学習のつまずきや遅れ、発達やコミュニケーション力などの課題など本人の特性に関することを要因とする長欠生徒に対して、学びの機会と場所を確を行うための校内体制を構築する必要がある。

42 小・中・義務教育学校（葛南教育事務所管内）

【1】校内教育支援センターの運営状況について（令和6年度）

- ・設置年月 令和3年4月
- ・児童生徒数 270名
- ・校内教育支援センター登録者数 20名
- ・利用者数（常時）7名
- ・校内教育支援センターに係わっている教員数 7名（支援員等 1名）
- ・利用するまでの流れ

本人・保護者・担任・管理職で、登下校時間を含めた利用時間、利用にあたってのルールや過ごし方について面談をして、正式利用する。

- ・ICTの活用の有無
 - ・エデュオプちばオンライン授業利用生徒の有無（2名）
- オンライン授業にとらわれず、取り組んでいる。取り組む場合は同時双方型。

【2】校内教育支援センターでの支援における事例

支援方針

長期欠席生徒や不登校傾向の生徒、集団生活に適応できない生徒の居場所として、支援を行う場とする。

管理職・生徒指導主任、学年主任・学級担任・カウンセラーと連携しながら運営する。

取組事例・工夫点

教科の授業やテストにとらわれず、図書室に行き、読書活動に取り組んだ。

日常的に、加湿器や花瓶の水を補充したり、拾得物を展示した。フラワーアレンジメントをすることもあった。

地域文化祭に向けて、看板やくじを作成するなど、準備に取り組んだ。台車で運搬する姿も見られ、地域や学校とのつながりを大切にした。

社会福祉法人浦安市社会福祉協議会のひとりぐらし高齢者への年賀状事業に参加し、年賀状作成に取り組んだ。

畑で、作物を育て、収穫した野菜を調理実習して、成果を実感できた。

【3】成果と今後の課題等

成果

教室に入れない生徒の居場所として利用し、支援を行うことができた。

また、多くの職員がかかわることで、話を聞く機会をつくることができ、信頼関係ができてきた。

課題

生徒の不登校の理由・状況、保護者の考えが多様なので個に応じた支援が難しい。

管理職・生徒指導主任、学年主任・学級担任・カウンセラーと連携が必要だが、共通理解の時間などの、定期的に情報を共有するための時間がとれない。